

平和記念だより

平成26年度 教職員のための 平和教育講演会

◆編集・発行:高松市役所 人権啓発課 平和記念係
◆連絡先:高松市番町一丁目8番15号
TEL:087-839-2293 FAX:087-839-2291

平成27年1月6日(火)高松市役所114会議室において、各学校での平和学習の参考にしていただくため、「教職員のための平和教育講演会」を開催しました。

今回は、高松空襲を記録する会の喜田清氏を講師に迎え、「慰霊碑への供養」と題して御講演いただきました。また、人権啓発課・平和記念係で小・中学校向けに貸出ししておりますパワーポイントデータ「高松空襲と戦時中の生活」等の学習例を発表しました。

「どんな子どもに育てて欲しいですか？」語り部として訪れた小学校でされた質問に対して、「おいしいものをたくさん食べて、よく遊び、よく勉強して、子どもらしい子どもに育てて欲しい。それが、戦争で亡くなったたくさん子どもたちへの供養になる。」

防空必勝の誓い
一私達は御國と母を戦わずに命を救出し、持場を守ります
一私達は必勝の信念を持って最後まで戦い抜きます
一私達は準備を完全に自信のつくまで訓練を積みます
一私達は命令に服従し、勝手な行動を慎みます
一私達は互に扶け合い力を合わせて防空に當ります



講演の冒頭でそう語る喜田さんは、「防空必勝の誓い」という戦時中の資料を示しながら、「死んでも学校・町・家を護れ」と厳命を受け、バケツリレー等の防空練習や、校舎に沿ってずっと防空壕を掘らされたこと、食糧不足の折、運動場はすべて畑に開墾したり、甘い草の根をかじってより分けたり、イナゴを捕まえて串刺しにし焚火で炙っておやつにしたこと等、戦時下での子ども時代の体験談や、高松空襲で被災したり家族を亡くしたりした人たちから聴き取りをしたお話をいただきました。

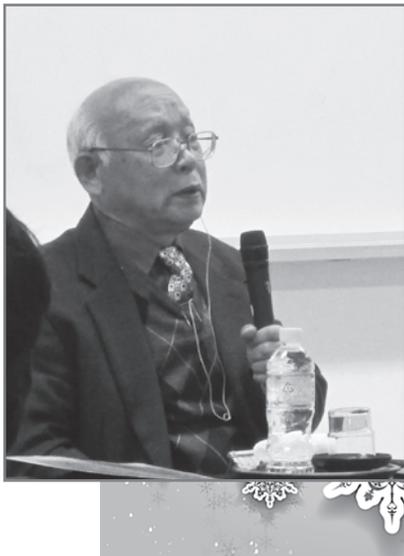


▲ 会場からの質疑に答える喜田さん

また、「私が助かったのは、ただ、偶然運が良かっただけ」であり、高松が空襲に遭ってもなお、昭和20年当時の新聞では「高松は空襲に遭ったけれども、市民の戦意はますます高まり、最後の勝利は日本にある」と謳い、戦後30年の郷土史には「高松は空襲に遭ったが、30年後見事に復興した」等、まったく同じような文言を並べているのを見て、「民衆の歴史は民衆が残さなければ」と思い、自称「千日の巡礼」として自転車で市内をまわり、空襲体験の聴き取りを始めたことをお話しいただきました。



「教職員のための平和教育講演会」感想



◆喜田さんの真剣な語り口のおかげで、戦時中の生活・教育の様子、地元高松での空襲「高松空襲」の痛烈なエピソードがとてもよく分かりました。どれほどの理解かは分かりませんが、いただけた知識と意思も子どもに伝え、平和を愛し、人が悲しむような争いをなくせるような人に育つよう種まきをしたいです。
(20歳代 男性)



◆「戦争は、勇気があるから生き残れるものではない」という一言が心に残りました。前後左右の方が亡くなる中、たまたま生き残った、そのたまたまから今現在我々に話をしてくれる喜田さんがいるということが大変貴重なことだと改めて思いました。
(30歳代 男性)

◆私の父は軍人であったため、小さい頃から戦前・戦中・戦後の話はよく聞かされ、ある程度理解していたつもりだが、その当時の立場や生活地等によって、その体験内容に大きな違いがあることが分かった。このような体験談を語り継げる方々が何人いるのだろうか。教育現場で戦争の事実をしっかりと伝えていく責任を感じた。
(60歳代 男性)

◆喜田さんには一度総合学習で学校に来ていただき、4年生の児童に高松空襲のことを話していただいたことがあります。はずかしいことに、日本の戦事中のことはたくさん学んできたにも関わらず、地元の高松空襲のことは知らないことが多いことに気付き、喜田さんの話の後いろいろな高松空襲の本を読みました。教師として、やはり地域の歴史をきちんと知り、それを授業でいかしたり、実際に戦争体験者の話を聞く機会をつくったりすることはとても大切だと感じました。
(30歳代 女性)

◆私は中学で国語を教えています。中学国語の各学年の教科書には戦争関連の読み物が盛り込まれ、国語科も戦争に対する深い知識と理解が求められています。授業をするにあたって、社会科の先生に資料集を借りたり、高校日本史の資料集を出してきてたりして学び直しましたが、単元が終わってからも、もっと取り組めたのでは…と感思しました。やはり戦争というテーマが教科横断的なものであり、私たち一人一人が探究し、意思をもつことが必要なのだと実感しました。
(20歳代 女性)

◆「パワーポイントを活用した学習」については、どの学校でもすぐに使えるものとなっており、教材開発の苦労が少なくなる分、非常に有効だと感じました。一方で、教材開発にあたった方との温度差を各々の実践者がどう埋めていくか、そこが重要だと感じました。
(20歳代 男性)



イベントレポート

高松市戦争遺品等収蔵品巡回展

【日 時】平成26年 11月1日(土)～2日(日)

【場 所】香南支所 1階ロビー

【内 容】高松空襲や戦時下の暮らしに関する写真パネル等の展示



今年度の収蔵品巡回展は、香南地区の文化祭にあわせて、2日間に渡り行いました。

今回は、パネル21点とキャプション13点、合計34点の展示を行いました。戦争の悲惨さと平和の尊さについて考えていただくきっかけになったのではないかと思います。



高松市平和記念館(仮称)の整備について・③ 高松市のジオラマ

平和記念館(仮称)では、高松空襲の状況を分かりやすく解説するため、新たに高松市のジオラマを設置します。

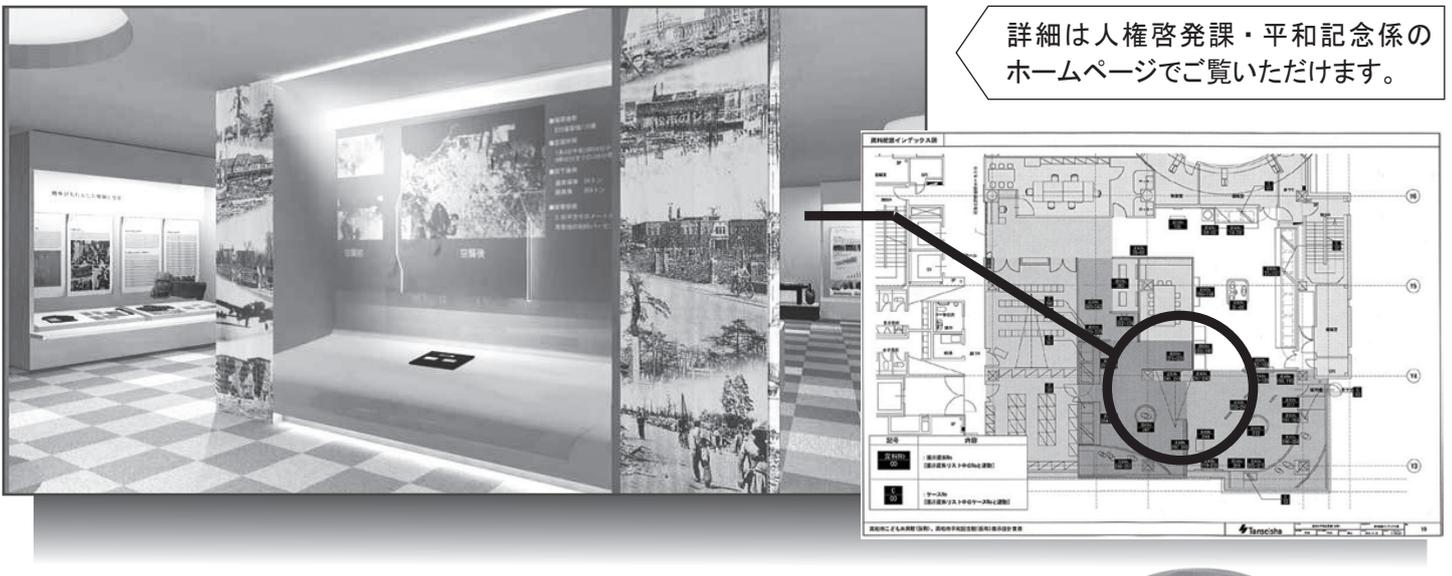
これは、高松市の旧市街地の白い模型(高松市のジオラマ)を壁に設置し、映像を投影することにより、立体的でリアルな市街地を再現するだけでなく、時間の経過による移り変わりまでも再現する展示となります。

平和記念館では、2種類の見せ方を行います。

1つめは、高松空襲の状況を一連の流れで見せるもので、空襲前の高松市の旧市街地の航空写真、B29の飛行経路、B29による爆弾投下、空襲時の状況、空襲後の高松市の旧市街地の航空写真、空襲規模を、順番に映像を効果音とテロップとともに投影していくものであり、リアルで迫力のある展示になると考えています。

2つめは、タッチパネル操作により、地域ごとの被害状況を調べることができるというものです。ジオラマの前にあるタッチパネルに町名が表示されており、見たい町名をタッチすると、ジオラマの該当する場所が点滅し、ジオラマの左右のスペースに空襲直後の写真と、現在の同じ場所の写真、被害の詳細情報等が投影されるというもので、理解しやすく印象に残るものになると考えております。

高松空襲について学び、市民が自ら平和について考えることができるよう、活用していきたいと考えております。



詳細は人権啓発課・平和記念係のホームページでご覧いただけます。

人権啓発課・平和記念係の資料貸出しについて

人権啓発課・平和記念係では、パネルや実物資料など収蔵資料の貸出しを行っています。昨年度は、個人・団体合わせて計27件、130点の貸出しがありました。



また、平成25年度からは高松空襲と戦時中の生活や、原爆について学ぶことのできるパワーポイントデータの貸出しも行っております。このパワーポイントデータは職員による講演(市政出前ふれあいトーク)も行いますので、地域や学校で戦争に関する展示や平和学習を行う際、ぜひ御活用ください。

貸出し期間・貸出し物品など、詳しくは人権啓発課・平和記念係までお問い合わせください。 TEL:087-839-2293



【軍用犬と従軍記章(軍用犬協会会員証)】提供者 井上 文子 様

提供者のご主人(といち)様の父親が大事に育てていたもの。
 写真の裏に、牡 エリッヒ・フオム・イノウエ 9ヵ月(昭和08年10月28日)と記載されている。

日本陸軍は、各国に習って人間に馴染んだ動物を軍用として利用した。馬や鳩もいるが、特に昔から人類の友といわれ、イギリスやドイツの軍隊に定着していた、軍用犬に重きを置いた。その臭覚や攻撃力を利用して歩哨や警戒兵と共に働き、時には敏捷な脚力で本隊への伝命などに利用したのである。そして第一次世界大戦の後陸軍が輸入したシェパードが、軍用犬の代名詞となったのである。

陸軍は補助兵器扱いと重視して、兵隊よりも大切に扱い、民間に補助金を出して飼わせた。戦争が始まると兵とともに第一線に出勤した。

しかし、終戦近くになると物資の不足から、1944年12月には畜犬の献納運動が行われ、大型犬は3円、小型犬は1円で買い上げられ、軍需皮革に一役買った。大型犬であるシェパードも同じような扱いを受けるようになってしまったのである。



【1銭陶貨】提供者 平田 正典 様



提供者の父親のものである。日本の1銭硬貨は明治・大正期は銅が、昭和初期には黄銅やアルミニウムが素材として使われたが、太平洋戦争終盤には金属はすべて軍需用に転用され、昭和19年からは錫が使用された。錫は貨幣素材としては不向きであったが、金属不足から仕方なく採用された。戦況の悪化により錫の調達も難しくなった日本は、ついには金属に代わる貨幣素材として「陶器」による貨幣の製造に着手したのである。

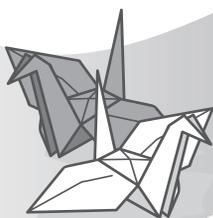
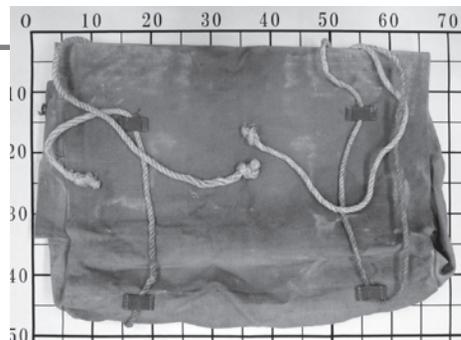
1銭陶貨は素材が粘土なので図柄は簡単なもので、表は富士山と壺の文字、裏には桜と大日本の文字があるだけである。芸術品ともいえる明治の金・銀貨を造った国の貨幣とは思えないほどの凋落ぶりである。昭和20年4月から終戦までに約1,500万枚作られたが、終戦を迎え、市中に出回ることなく粉碎破棄された。しかし、処分が徹底されなかったのか、かなりの数が現存している。

【背囊】提供者 太田 宣子 様

提供者のご両親のもの。戦後もしばらくは物資が不足し、特に食糧品や衣料品については切符制になるほど厳しかった。この背囊の中に着物などを入れ、田舎の親戚を頼って食糧と交換にいていたようである。

そもそも背囊とは軍隊で徒歩部隊の将兵が背負う袋として使用したものである。中には食糧、弾薬、衣料や個人生活用品を入れ、外側に携帯テント、外套、飯盒などを括り付けるようになっていた。

最初は、堅固な皮革や毛皮を材料として耐久性や保湿力を重んじたが、徐々に量産に便利で耐久性のある綿布ズック製のものが多くなった。それでも現在のリュックサックに比べると随分重く、使い勝手の悪いものであった。



編集
メモ

今回は、香南支所での巡回展や、「教職員のための平和教育講演会」の様子のほか、平和記念館(仮称)の整備についてお知らせしました。人権啓発課・平和記念係ではパネル等の資料貸出しも行ってまいりますので、平和について改めて考えるきっかけ作りには是非お役立てください。



▼ホームページアドレス (平和啓発の推進事業がご覧いただけます)

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/18976.html>